

ニュースレター

News Letter

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

「インカルチュレーション」モデルについて

本研究所の目指す学際的営為の中心的テーマの一つは「キリスト教」の普遍的メッセージが、特定の「文化」とどう関わり、その文化の中でいかに受肉するかと言った問いを問うことにあると言えよう。これは、宣教学の重要なテーマとして、宗教改革時代から20世紀半ばまで、福音が宣教地において有効に伝達されているか否かの問題として論じられてきた。その過程を概観すれば、既存社会とその文化的伝統に対する福音の「適応(adaptation)」に関する考察であると言えるが、それをカトリックでは、福音の「順応(accommodation)」「文化変容(acculturation)」の問題として捉えたのに対し、プロテスタントでは、福音の「土着化(indigenization)」の問題として論じてきたのである。

その流れにおいて、20世紀末に宣教学者D. ボッシュの『宣教のパラダイム転換』は新たな視座を示したのである。ボッシュは13項目の宣教パラダイムの諸要素について詳述しているが、中でも「文化内開花としての福音宣教」モデルが「文化横断的パラダイム」として最も重要なモデルだと論述している。「文化的開花」との語は‘Inculturation’の訳語で、日本語として定着しておらず、通常「インカルチュレーション」との呼称を用いている。

「インカルチュレーション」モデルとは、その「受肉の次元」において、福音そのものが一つの特定の民族とその文化の中で「肉となる」ことによって、新しい文脈において、福音がまったく新しい実を結ぶのである。このアプローチは、従来の信仰は「実」、文化は「殻」との概念を打ち破り、文化における新しい「開花」を意味する。それは、丁度、特定の土壌に植えられた「種子」が、まったく美しい花を開かせることに例えることができる。すなわち、福音の「種」が、特定の文化の中に「受肉する」ことによって、その文化を変容させ、その変容した文化によって、福音がさらに豊かなものに変容していくと言った双方向的モデルである。こうしたテーマで「キリスト教」と「文化」の新しい関係性を問うことは今後の研究所にとって有益なものになるのではあるまいか。



松田 和憲 学院長

キリスト教と文化研究所 奉仕・ボランティア教育研究グループ 研究会報告

細谷 早里

奉仕ボランティア教育研究グループではボランティア活動を人間形成はもちろんのこと学業とどのように結びつけられるかという取り組み、サービス・ラーニングについて研究をしてきました。今年度は実践に加え、「社会貢献」と「学び」を繋ぐありかたについてさらに理解を深めるために新たに国際バカロレア (IB) ディプロマプログラム (DP) で必修とされているCAS (創造性Creativity, 行動Action, 奉仕Service)に焦点をあて、研究活動を行いました。講師の先生を招いた公開研究会とシンポジウムの様子をこの紙面を借りて報告したいと思います。

① 2019年11月30日 (土) 公開研究会

地域貢献する学び

—インターナショナルバカロレアCAS (Creativity Action Service) の取り組みを参考に—

武蔵野大学附属千代田高等学院国際部長、IBコース長のドゥラゴ英理花氏を講師として、CASの目指すもの、ドゥラゴ氏に関わってきた先進的な試みについてお話を伺った。IBのCASの活動では生徒が独自に教室以外での活動を決める。つまり、生徒の主体性と自主性が重要な要素になっている。CASのうちCreativity(創造性)の具体例として、楽器演奏や演劇活動、プロジェクト企画のリーダーなど、Action(活動)は目的を持った遠征や国際的なプロジェクトの参加など、Service(奉仕)はボランティア活動(地域の施設など)やチャリティイベントの参加などがある。これらには挑戦や学びの要素が含まれていることが重視される。合計18ヶ月の活動が要求されているが、最低でも週3時間程度、最低1ヶ月継続するものであることが求められ、週ごとに活動を行なっている証明が要求される。これらの経験的学習を通して、実生活への応用、責任感の育成、問題解決能力、改革する力への認識を①調査、②準備、③行動、④振り返り、⑤実際に示すことというCASの5段階を経る中で身につけていくことを目指している。

ドゥラゴ氏の勤務する学校での活動例をあげると、NPO法人が行なっている「おにぎりプロジェクト」に生徒主導で全学的に参加したというものがある。このプロジェクトはおにぎりの写真をSNSにひとつ投稿することによって5食分の給食をアフリカ、アジアの子どもたちへ届けるというもので、貧困について事前学習をし、生徒一人ひとりがレシピを考え、作り、写真におさめ、その写真を学校公式SNSで発信して支援を行なった。生徒の振り返りから、生徒は知識を得たのみならず思考や行動の変容が見られたことが明らかになった。

またこの研究会ではIBプログラムで高校を卒業した大学生4名がそれぞれの体験を語ってくれたが、全員がCAS活動は有意義なものだと感じていたこと、これによってのみ身につけられたと思われる力があること、これがなかったら今の自分はないと語っている。何よりも自分の言葉で自分の体験を分析し、人々に伝えられていることが印象深かった。



IBプログラムで高校を卒業した4人の大学生



ドゥラゴ英理花氏

② 2020年2月9日 (日) 公開シンポジウム

社会に貢献する学びとは何か

IB CASの視点から

IBの研究者である自由学園副校長の成田喜一郎氏から「社会に貢献する学びとは何か」について Holistic Educationの立場からお話をいただいた。前回の実践報告を中心とした研究会とは趣を異にし、「社会とは何か」「貢献とは何か」そして「学びとは何か」という哲学的で永続的な問いを中心に据え、その問いにCASの視点から考えていくというものであった。IBの学習者像の中から、「振り返りができる人」と「挑戦する人」がCAS活動に関連する重要な学習者像であると取り上げ、特に「振り返りができる人」の意味するところを深く掘り下げて説明して下さった。その際「振り返り」と訳される Reflectionは単なる過去への振り返り・反省・省察ではなく、未来に向かい、学びに反映させることを意味するため、「問いなおしと見直し」という捉え方が良いのではないかとしている。また、振り返りであるもの、ないものリストも示され、通常授業で振り返りとして行なっているものも厳密には振り返りではない場合があり注意が必要である。例えば、振り返りは強制されるべきではなく、正解もない。様々な方法で行われ、自分が何をしてどのように感じたかを考えるものであり、今後の計画に役立つものである。振り返りの方法は自身が選択、決定、実践するべきであるとのことであった。振り返りは認知レベルにとどまらず、情動、感覚運動レベルに往還すべきものであるがゆえ、その表現の仕方は文章とは限らず、一語のキーワードであったり、詩や絵である場合もある。そしてそう表現した理由や根拠を記述し、分かち合うことが大切である。これを成田氏は「学びを全身化・共同化」という表現で表し、これが可能となったときにこそCAS活動が単なる方法論に止まらない真のアクティブ・ラーニングとなり、自立的学習者が育ち、自律的市民が育つ活動になるとしている。不確実性・複雑性に満ちた社会への貢献と学びとは相即する関係にあるのだということを変更して考えさせられた。

講演後のディスカッションでは参加者全員が振り返りについての意見をや素朴な疑問を分かち合うことができ、各自の授業の取り組みを振り返る良い機会となった。



成田喜一郎氏



講演風景

新所員紹介



David John Heath

私は、本学国際文化学部英語文化学科に就任して4年が経ちますが、就任する約25年前から翻訳業を中心に広告業界と放送業界で働いております。その経験を、研究と教育に生かしたいと考えておりました。就任する前に旧関東学院女子短期大学におきまして、10年ほど非常勤として働かせて頂いたことがあります。キリスト教信者として、バプテスト派の組織である関東学院に関われたことは、安心感があり、光栄なことです。

私の歴史は、キリスト教者である英国オクスフォード在住の母の元で、メソヂスト教会に通いながら英国で育ったことから始まります。その後、日本の文化と日本語に興味をもち、日本に移り住み、日本人女性と結婚しました。1994年に妻と共に鎌倉で再洗礼を受けました。

最近、新型コロナウイルス感染の不安が募る中、イエス様に信仰を置く重要性に改めて気付かされました。新約聖書のヨハネによる福音書 14章27節「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」を心に刻みました。

私はキリスト教と文化研究所の所員になりましたが、改めてキリスト教について申し上げたいのは、2千年近く読み継がれる聖書を難しく考えないで、もっと私たちの身近な生活の中に、聖書の御言葉を通して考えることで、日々を生きていけたなら、私たちの人生の励みになるということです。そして、そのような気付きを、少しでも多くの皆さんに広げていくために、何らかの貢献が私にもできるなら嬉しいです。

編集委員会からのお知らせ

研究所報『キリスト教と文化』の投稿受付の日程の変更(2020年度から)について

所報『キリスト教と文化』の投稿申し込み日および投稿原稿の提出締め切り日は、2020年度より下記のとおり毎年同じ日付となります。

- ・ 投稿申し込み締め切り： 9月1日
- ・ 投稿原稿提出締め切り： 10月1日

また、原稿募集案内の郵送については、2020年度に限り7月頃にお送りいたしますが、2021年度以降はご案内の郵送は行われません(毎年同じスケジュールになれば日程の告知の必要がなくなるため)。

ご理解のほど宜しくお願いいたします。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL：045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)

FAX：045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)

発行者：細谷 早里
Director：Sari Hosoya